

米国 果実の生産見通し(リンゴ、ナシ、ブドウ、モモ、柑橘類)

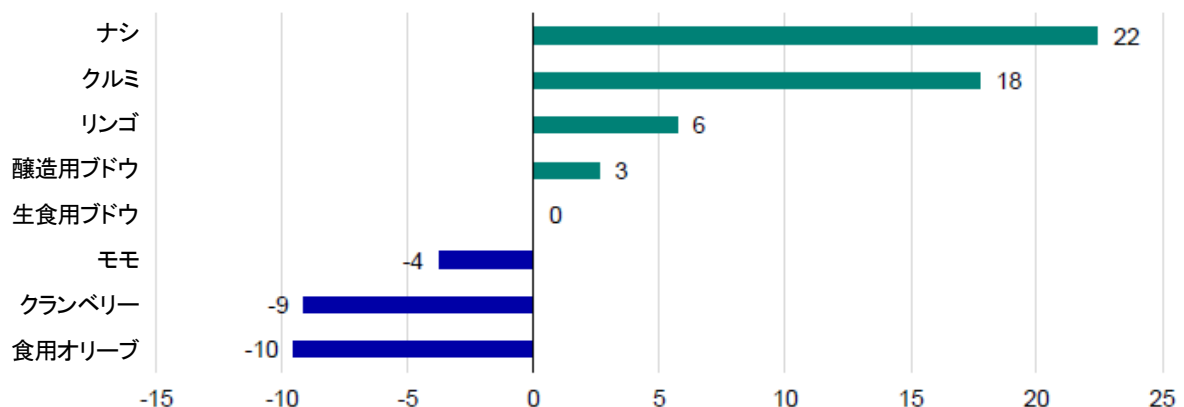
米国農務省経済調査局 2025年9月25日

これは、米国農務省経済調査局の「果実及びナッツ類の見通し 2025年9月」のうち主要果実の関係箇所を訳したものです。文中の計量単位は米国式であり、1トン(ショートトン、米トン)＝約907.2kg、1ポンド＝約0.4536kg、1エーカー＝約0.4047ヘクタール、1ガロン(液体)＝約3.7854リットルです。

2025年秋の生産量予測

米国農務省農業統計局(NASS)の2025年予測生産量は、ナシ、クルミ、リンゴ及び醸造用ブドウでは前年比で増加した一方、モモ、クランベリー、食用オリーブでは減少した。2025年のカリフォルニア州の生食用ブドウの生産量は前年からの横ばいと予測されている。ナシの生産量は、太平洋岸北西部の果樹園が前年の冬の低温被害から回復したことにより22%の増加が見込まれている。米国のリンゴの収穫量は前年比6%増加すると予測されており、最も生産量の多いワシントン州では史上最高の80億ポンドが見込まれている。今年はカリフォルニア州及び南東部でモモの生産量が減少し、米国全体の合計でも減少すると予測されている。カリフォルニア州のクルミの生産量は、暖冬とその後の猛暑の悪影響を受けた2024年のシーズンを経て、2025年には18%増加すると見込まれている。

主要果実生産量の前年比変化予測 2024年実績→2025年予測値



2024年の総生産量に対する2025年の予測値の変化率

F＝予測値

注：生食用ブドウの予測値はカリフォルニア州、醸造用ブドウの予測値はカリフォルニア州及びワシントン州

出典：米国農務省農業統計局「作物生産報告書(2025年8月及び9月)」並びに2025年カリフォルニア州食用オリーブ予測調査報告書のデータに基づき、農務省経済調査局が作成

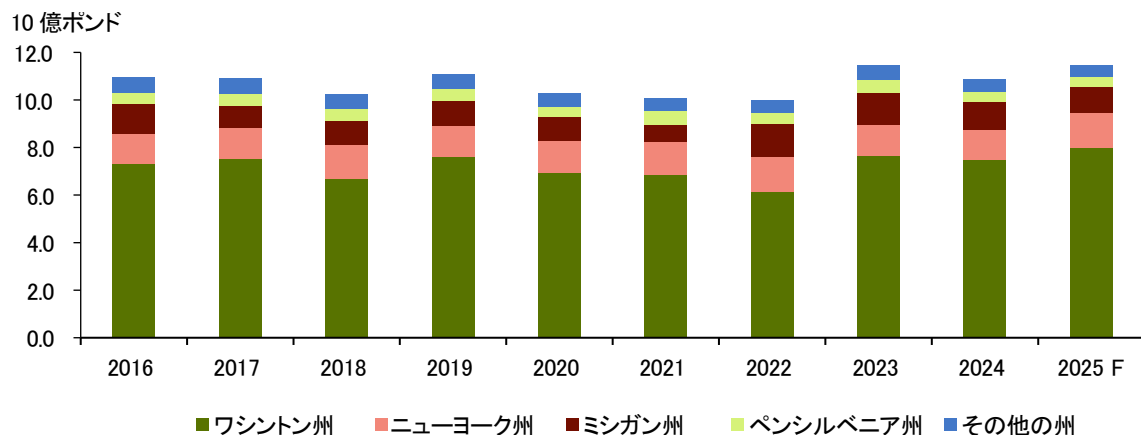
非柑橘類果実の見通し

<リンゴ> 米国の2025年の収穫量は増加の予測

8月の農業統計局「作物生産報告書」では、2025年の米国のリンゴ収穫量は115億ポンドと予測されている。同局が調査した主要7州の予測によると、過去10年間で生産量が110億ポンドを超えた3回目の年となる(図3)。予測のとおりであれば、2025年のリンゴの収穫量は2024年より6%多く、2023年と同程度となる。

ワシントン州は最大のリンゴ生産州であり、2025年のリンゴ収穫量は前年比7%(5億2千万ポンド)増の80億ポンドと予測され、実現すれば同州として史上最大となる。ワシントン州果樹協会は2025年8月に、今シーズンの果実の品質は高いと評価した一方で、労働力不足のため、より選択的な収穫判断が求められ、最終的な収穫量が減少する可能性があるとは指摘した。ワシントン州産リンゴの平均約80%が生鮮市場に出荷されており、この率は、同州に次ぐ3つの主要生産州(ニューヨーク州、ミシガン州、ペンシルベニア州)の過去5年間の平均(それぞれ50%前後)を上回っている。米国リンゴ協会(USApple)の2025年業界見通しレポートによると、2025/26販売年度(8月～翌年7月)において、ワシントン州では主要3品種(ガラ、ハニークリスプ、グラニースミス)が出荷量の48%を占めると予測されている。

図3 2025年の米国(調査対象7州)のリンゴ生産量は増加



F＝予測値

注：総生産量は農業統計局が調査した7州のデータに基づく。「その他の州」はバージニア、カリフォルニア、オレゴンの各州
出典：米国農務省農業統計局のデータを使用して経済調査局が作成

ニューヨーク州の2025年のリンゴ生産量はワシントン州に次ぐ第2位で、前年比12%増の14億5千万ポンドと予想される。これが実現すれば、ニューヨーク州の2025年の収穫量は2022年以来最大となる。農業統計局の9月初旬時点の作物状況評価では「良好」～「非常に良好」が23%で、昨年の同じ週(82%)及び過去5年平均(58%)を下回った。コーネル大学協同農業普及局によると、収穫開始後は州全体で高温乾燥の生育条件が緩和され始めた。ニューヨーク州のリンゴの収穫は、9月時点で過去5年間の平均を上回るペースで進行しており、10月末までには概ね完了する見込みである。米国リンゴ協会によると、ニューヨーク州の主要3品種(マッキントッシュ、ガラ、ローマ)は2025/26年度の生産量の31%を占める見込みである。

ミシガン州に関する農業統計局の2025年産リンゴ生産予測は11億ポンドであり、昨シーズンに比べて4%少なく、過去最高であった2022年の13億6千万ポンドと比べて19%少ない。農業統計局が調査した7州の中で、ミシガン州は過去5シーズンのうち3シーズンでリンゴの単位面積当たり収量について1位または2位にランクされており、これは密植栽培品種の栽培面積の増加に一部起因している。米国リンゴ協会はミシガン州の主要3品種(ガラ、ふじ、レッドデリシャス)が2025/26年度に総生産量の41%を占めると予測している。

ペンシルベニア州は、2025年に4億3千万ポンドのリンゴを生産すると予測されており、これは米国の生産量の4%に相当する。今年の予測は2024年の収穫量と比較して100万ポンドの減少(0.2%減)となるが、全体的な品質は高いと報告されている。2025年8月末時点で、ペンシルベニア州のリンゴの作物状況評価では81%が「良好」～「非常に良好」とされ、過去5年間の平均(75%)を上回った。2025年9月21日に終わる週までに、ペンシルベニア州のリンゴの収穫は90%完了し、5年間の平均(60%)を大きく上回った。米国リンゴ協会によると、ペンシルベニア州では主要3品種(ヨーク、ゴールデンデリシャス、ふじ)が2025/26年度の総生産量の57%を占めると予測されている。

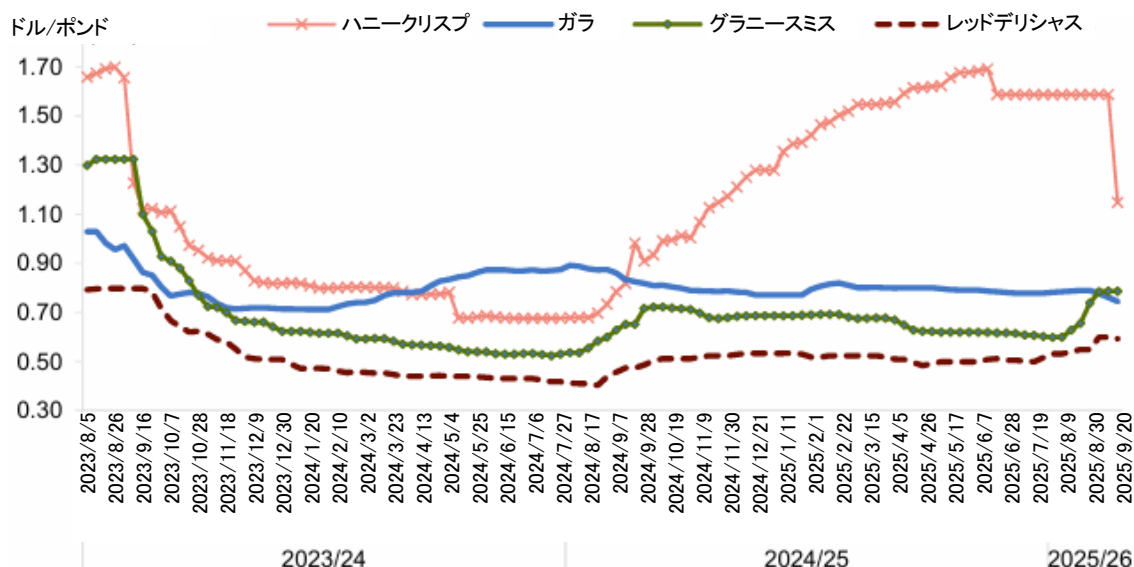
バージニア州及びオレゴン州は、今年それぞれ1億6,500万ポンドのリンゴを生産すると予測されている。バージニア州では春の低温によりリンゴの花が被害を受け、生産量は前年比28%減少すると見込まれている。一方、オレゴン州の2025年のリンゴ収穫量は前年比38%増で、2020年以来の最大となると見込まれる。カリフォルニア州では農業統計局が調査した7州の中で最も少ない1億6千万ポンドのリンゴの生産が見込まれている。これら3州は合わせて、2025年の米国の商業的リンゴ生産量の4%を占めると予測されている。

2025/26年度の収穫見通し ハニークリップを中心に：夏の後半は、前シーズンの貯蔵リンゴから新シーズンに収穫されたリンゴへの移行期であり、これは8月から10月まで続く。米国リンゴ協会によると、2025年6月1日時点の2024/25年度産生鮮リンゴの貯蔵量は前年同期比で2%少ないものの、過去5年間の平均と比較すると約35%多い。

2023/24年度産の記録的な収穫量の反動として、2024/25年度はハニークリスピの収穫量が少なく、同品種の2025年6月の貯蔵量は前年比47%減少した。米国リンゴ協会は、隔年結果で知られる同品種の生産量が、2025/26年度には2023/24年度を上回ると予測している。そうなれば、同品種は数量で初めてグラニースミスを上回り、ガラ及びレッドデリシャスに次いでリンゴ品種の第3位にランクされることとなる。

ハニークリスピは、主要なリンゴ生産州であるワシントン州及びミシガン州において、トップ5品種の1つとなっている。2025/26年度の価格が2023/24年度と同様の推移をたどる場合、ハニークリスピが増加することで、秋の収穫シーズン及び貯蔵リンゴのシーズンを通じて価格にさらなる下押し圧力がかかり、2024/25年度と比較して価格プレミアムが低下する可能性がある(図4)。

図4 上位リンゴ品種の出荷価格(FOB)、2023年8月～2025年9月中旬



FOB＝選果・梱包済み出荷価格(輸送費を含まない)

注：リンゴの販売年度は8月に始まり、翌年7月に終わる。調査対象は国内(ワシントン州、ニューヨーク州、ミシガン州)産の慣行栽培リンゴであり、トレーパック付き40ポンド箱入り、入数64～88、等級は最上級(extra fancy)である。

出典：米国農務省農業流通局「市場ニュース」の出荷地価格データを使用して経済調査局が作成

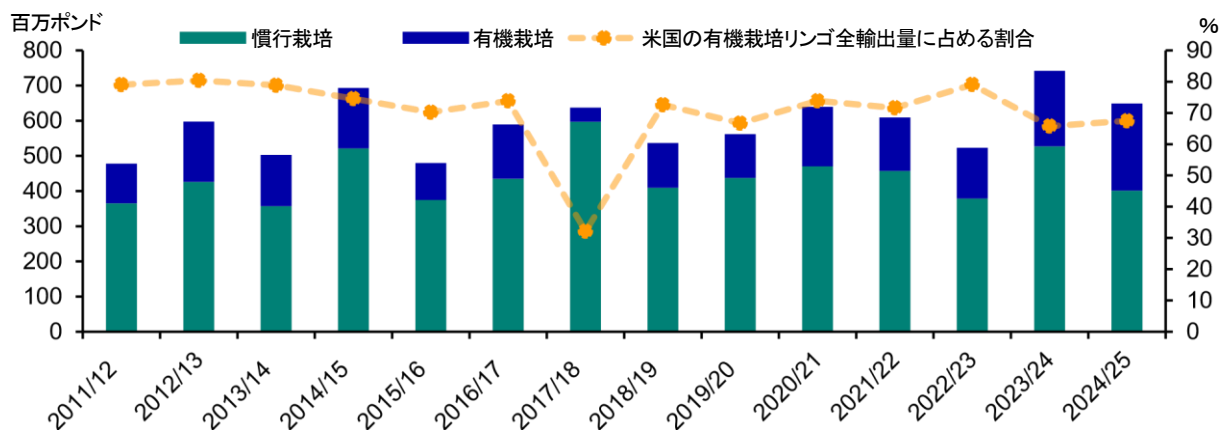
過去2シーズンにおいて生鮮リンゴの輸出量は増加、輸入量は減少：米国は2024/25年度の生鮮リンゴ出荷量のうち前のシーズンと同じ約25%を輸出した。2024/25年度の米国の生鮮リンゴ輸出量は18億5千万ポンド、輸出額は10億ドルであった。輸出量は2023/24年度比で1億2,900万ポンド(7%)減少したが、それ以前の3年間(2020/21年度～2022/23年度)の平均と比較すると19%増加した。

一方、2024/25年度の輸出額は、輸出単価の上昇(4%増)を反映して前のシーズンに比べて3%減となったが、減少幅は抑えられた。米国の生鮮リンゴ輸出先上位5カ国のうち、リンゴ1ポンド当たりの輸出単価が最も低かったのはインド(44セント)であり、最も高かったのはベトナム(63セント)と台湾(61セント)であった。

ワシントン州農業局が収集した輸出データによると、インド向けのワシントン州産リンゴ輸出量の約70%は低価格のレッドデリシャスであった。これに対し、ベトナム向けではガラ及びコズミッククリスピが2024/25年度の輸出量のそれぞれ約20%を占め、台湾向けではふじが最多で輸出量の70%以上を占めた。

米国の生鮮有機リンゴ輸出量は2024/25年度に史上最高を記録：米国の生鮮有機リンゴ輸出量は2023/24年度の3億2,670万ポンドから2024/25年度には3億6,800万ポンドに増加した。有機リンゴは、2024/25年度の生鮮リンゴ総輸出量及び総輸出額の20%を占めた。メキシコは、2024/25年度における生鮮慣行栽培リンゴ(数量シェア27%)及び有機リンゴ(同67%)の最大の輸出先であった(図5)。カナダは従来有機リンゴの輸出先として第2位であったが、2年連続でインドが7%(2,450万ポンド)を占めて2位となり、カナダは第3位(2,060万ポンド)となった。前年比では、インド向け有機リンゴの輸出量は18%減少したが、カナダ向けは変わらなかった。

図5 2024/25年度の米国のメキシコ向け生鮮有機リンゴ輸出量は史上最高



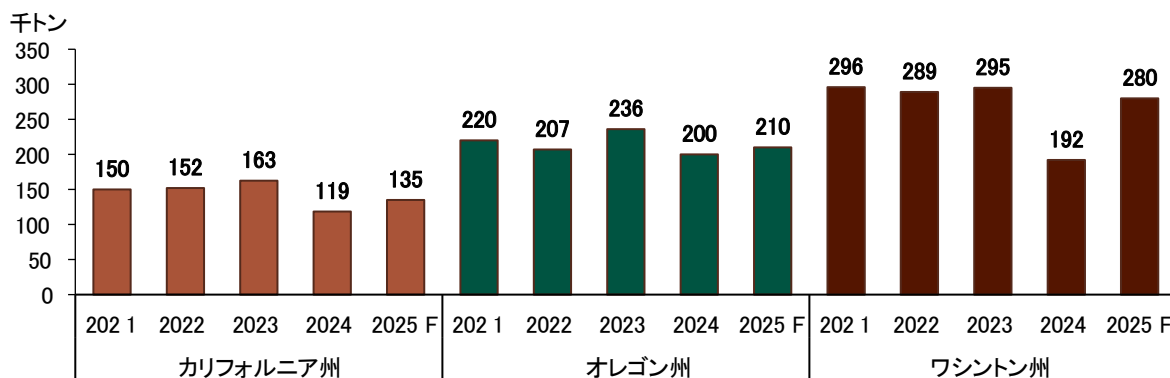
注：リンゴの販売年度は8月に始まり、翌年7月に終わる

出典：米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

<ナシ> 2025年の収穫量は依然として歴史的な低水準

米国農務省農業統計局による2025年のナシの予測生産量は62万5千トンで、前年の歴史的に少ない収穫量からは22%増加したものの、それ以前の3年間(2021～2023年)の平均を7%下回っている。2024年の米国のナシ生産量は1967年以来の最低となったが、これは農業統計局が調査した3州(カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州)すべてで悪天候により生産量が減少したことも一因である(図6)。2025年には収量の回復が見込まれているが、予測どおりであった場合でも、今シーズンの米国のナシ生産量は1972年以来2番目に少ない記録となる見込みである。2024年及び2025年のナシ生産量の低下は、昨シーズンの悪天候による減収に加え、米国の加工用ナシ(主に缶詰用)の長期的な減少傾向を反映している。

図6 上位3州の2025年産ナシの予測生産量は増加



F=予測値

出典：米国農務省農業統計局のデータを使用して経済調査局が作成

ワシントン州は通常、米国最大のナシ生産州であり、今シーズンは28万トンの生産が予測され、これは米国の収穫量の45%に相当する。ワシントン州の2025年の予測生産量は、不作だった昨年の収穫量と比較して46%増加するが、それ以前の3年間(2021～2023年)の平均と比較すると5%少ない。今年は春から夏にかけての良好な生育条件が収量増加に寄与した。最新の「ワシントン州果樹栽培面積レポート」(2017年)では、バートレット品種及びダンジュー品種が、それぞれナシの結果面積の約40%ずつを占めた。バートレットは8月から9月上旬にかけて収穫され、生鮮市場向けの出荷は通常2月までに終了する。ダンジューは秋の後半に収穫され、貯蔵可能期間が長いので翌年の夏まで生鮮市場で消費される。

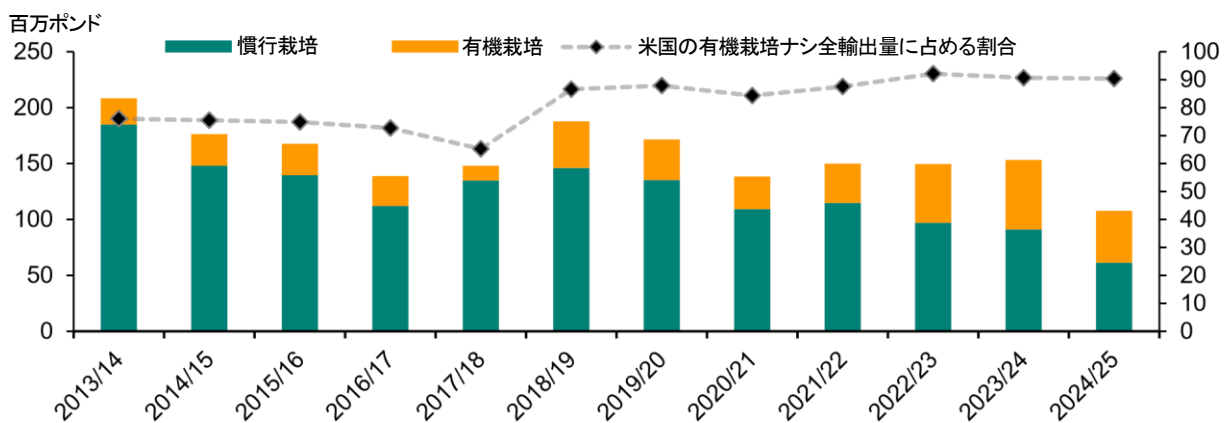
オレゴン州の2025年の予測生産量は21万トンであり、米国全体の生産量の34%を占める。予測のとおりであれば、2024年比で5%増加するが、それ以前の3年間(2021～2023年)の平均を5%下回ることとなる。

カリフォルニア州の2025年の予測生産量も昨シーズンより増加し、13万5千トンと見込まれている。これは前年より14%多いが、それ以前の3年間(2021～2023年)の平均よりも13%少ない。ワシントン州及びオレゴン州のナシが主に生鮮市場向けに栽培されているのに対し、カリフォルニア州のナシの収穫量の半分以上は加工用(主に缶詰またはフルーツカクテル)に仕向けられる。カリフォルニア州の加工用ナシの大部分は、従来からバートレット品種が主流であり、今後もその傾向が続くと見込まれる。

2024/25年度の生鮮ナシの輸出量は数十年ぶりの低水準：2024/25年度(7月～翌年6月)の生鮮ナシ輸出量は合計1億5,900万ポンドであった。この数量は前年度に比べて35%少なく、1988/89年度以来最低の輸出量であった。また、米国は初めて生鮮ナシの純輸入国となった。

2024/25年度の慣行栽培の生鮮ナシの輸出量は、2023/24年度と比較して数量ベースで39%、金額ベースで24%減少した。生鮮有機ナシの輸出も、数量ベースで25%、金額ベースで16%減少した。2024/25年度の有機ナシの輸出量は5,130万ポンドで、輸出量の3分の1を占めた。メキシコは、2024/25年度において、慣行栽培ナシ(数量シェア57%)及び有機栽培ナシ(同90%)の最大の輸出先であった(図7)。

図7 メキシコは米国の生鮮有機ナシの最大の輸出先



注：ナシの販売年度は7月に始まり、翌年6月に終わる。マルメロは数値に含まれない。

出典：米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

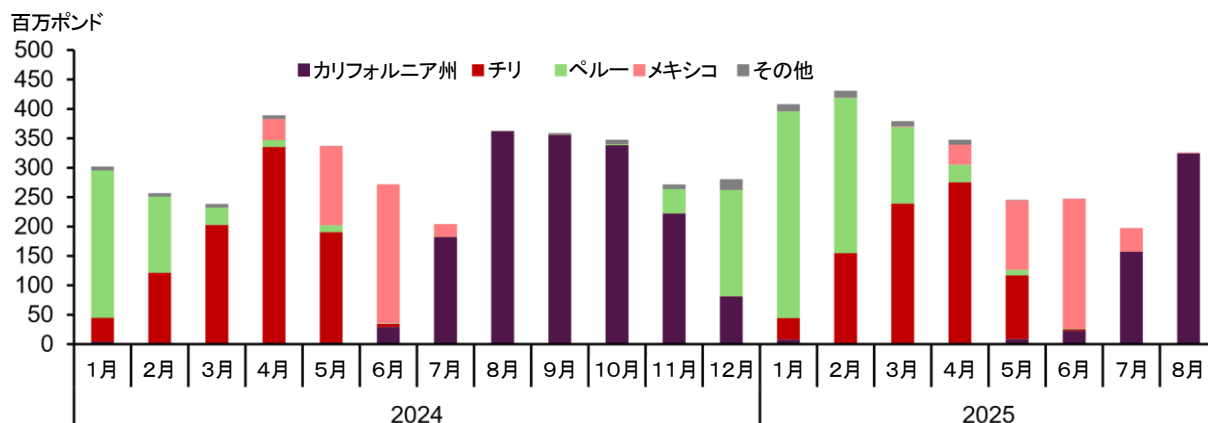
<ブドウ> 2025年の生産量は増加

米国の2025年のブドウ収穫量は559万トンと予測されており、2024年の540万トンから3%増加するものの、ピークであった2013年の863万トンと比較すると大きな減少(35%減)となる。最大の生産州であるカリフォルニア州の生産量が2013年の774万トンを最大値として過去10年間減少傾向にあり、2024年の米国のブドウ生産量は1987年以来の最低であった。2025年には、カリフォルニア州、ニューヨーク州、オレゴン州ではブドウの生産量が前年比で増加し、ワシントン州では減少すると予想されている。

カリフォルニア州は米国最大のブドウ生産州であり、国内生産量の約90%を占めている。2025年のカリフォルニア州のブドウ生産量は、2024年の488万トンより2%多い498万トンと見込まれている。昨年は、カリフォルニア州のブドウ生産量の約18%が生鮮市場向けであり、残りの82%は加工用で、その大部分が粉砕されてワインに加工された。2025年のカリフォルニア州の生食用ブドウ生産量は前年比横ばいの98万トンと予測されており、2023年8月にハリケーンヒラリーが減衰した低気圧が収穫のピーク時に襲来して以来、3年連続で100万トンを下回る見込みである。

生食用ブドウの出荷量が過去最高：2024/25年度(5月～翌年4月)の1人当たりの生鮮ブドウ供給量は、前年比15%増で過去最高の9.56ポンドであった。輸入量は20億ポンドを超えて過去最高を記録し、2年連続で国内生産量を上回った。8月から11月にかけて、カリフォルニア州は国内消費向け生食用ブドウの主要な供給地である(図8)。冬季にはペルーからの輸入ブドウが入荷し、春にはチリ、初夏にはメキシコからの輸入に移行する。カリフォルニア州からの年初来9月中旬までの出荷量は減少した。

図8 生食用ブドウの出荷元は季節的にカリフォルニア州から輸入に移行



注: その他の輸入先は、ブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、イタリア、ニュージーランド、南アフリカ、韓国、スペイン等である。
出典: 米国農務省農業流通局「市場ニュース」のデータに基づき経済調査局が作成

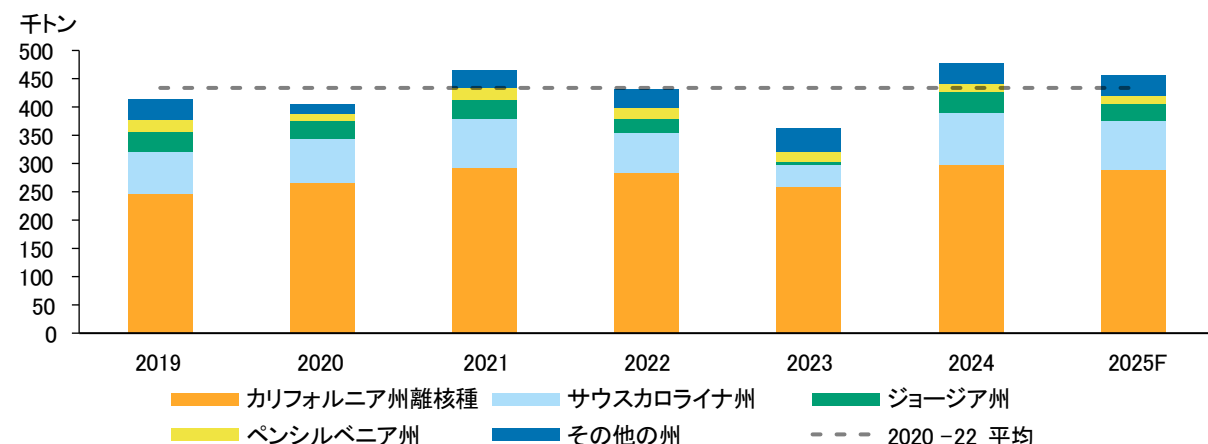
(以下、醸造用ブドウ及びクランベリーについて省略)

<モモ> 米国の2025年の生鮮モモ供給量は減少

農業統計局の8月の作物生産報告書では、2025年の米国産モモの予測生産量は68万2,500トンで前年に比べて4%少ないが、2023年よりは16%多い。最大の生産州であるカリフォルニア州では、離核種、粘核種の両タイプとも生産量が前年比で減少すると予測されている(それぞれ3%減及び0.4%減)。

カリフォルニア州の離核種のモモは、平均して約70%が生鮮市場に出荷されるが、粘核種はほぼ加工専用に栽培されている。農業統計局が調査した他の州のモモは、生鮮市場向けに栽培されている離核種が主体である。カリフォルニア州の離核種の収穫予測と農業統計局が調査した他の州のデータを合わせると、離核種の推定生産量は前年より4%少なく、2020年～2022年の平均に比べると5%多い(図11)。

図11 2025年のカリフォルニア州の離核種と他の主要6州のモモ生産量の合計は減少



F=予測値

注: カリフォルニア州の粘核種は含まない。その他の州はコロラド、ミシガン、ニュージャージーの各州である。ワシントン州は、2024年及び2025年の年次調査に含まれていないため、2019～2023年のデータからも除外した。

出典: 米国農務省農業統計局「非柑橘類果実及びナッツ類統計要覧(各年)」及び「作物生産報告書」(2025年8月)」に基づき経済調査局が作成

南東部のモモ生産量は昨シーズンより少ない: 2025年のサウスカロライナ州のモモの生産量は前年より7%少ない8万5千トンと見込まれる。ジョージア州のモモ生産量も2024年の3万7,200トンから2025年には3万トンに減少すると予測されている。サウスカロライナ州及びジョージア州は、米国のモモ生産量においてカリフォルニア州に次いで第2位及び第3位に位置している。南東部に位置する両州の2025年のモモ生産

量は前年より少ないが、低温被害を受けた2023年の収穫量と比較すると依然として大幅に多い(サウスカロライナ州で119%増、ジョージア州で509%増)。南東部では、モモの収穫は8月末までに終了しており、クレムソン大学農業普及所の報告によると、今年のサウスカロライナ州では雨が多く湿度の高い夏の天候により病害圧力が高まったものの、作柄は総じて良好であったとされている。

国内のモモ生産量の小幅な減少と価格の上昇は、今シーズンの米国の生鮮モモ輸出量の減少を後押しした。2025年の年初来7月までの生鮮モモ・ネクタリンの輸出は、数量ベースでは3%減少したが、単価が3%上昇した結果、総輸出額は前年同期比で横ばいとなった。カナダとメキシコが引き続き米国のモモ輸出先の上位を占めており、両国で輸出量の78%を占めている。

米国の有機モモの年初来輸出量は昨シーズンと比較して減少したが、依然として輸出量の約13%を占めている。今シーズン、米国の生鮮有機モモ・ネクタリンの輸出の約半分はメキシコ向けであった。

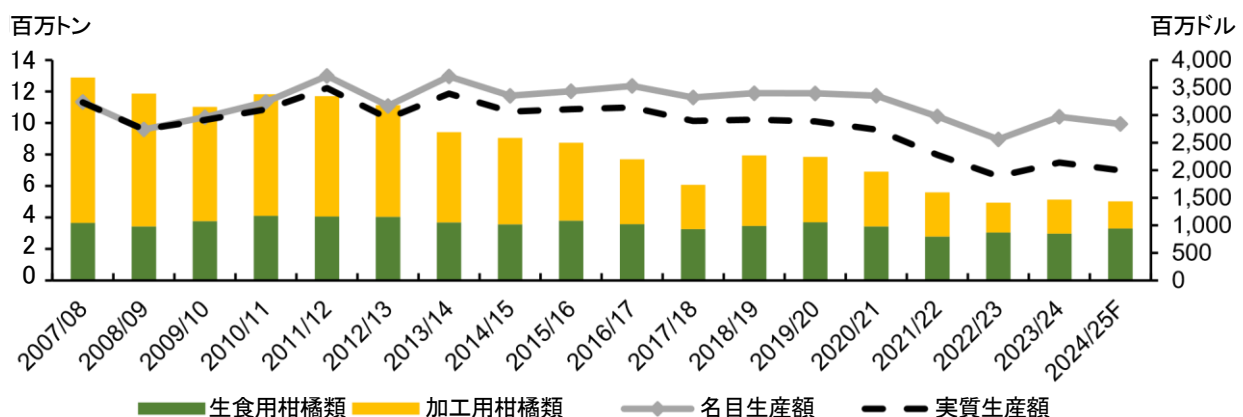
(以下、オリーブ及びナッツ類について省略)

柑橘類の見通し

2024/25年度の米国の柑橘類生産量は減少

農務省農業統計局(NASS)が2025年8月29日に公表した2024/25年度産柑橘類生産量の最終推計値によると、オレンジ、グレープフルーツ、レモン及びタンジェリンの国内総生産量は500万トンに達し、そのうち約3分の1(34%)が加工用に仕向けられた(図17)。この総生産量は2023/24年度に比べて2%少なく、過去84年間で2番目に少ない。総生産額は28億4千万ドルと推定され、インフレ調整後の実質生産額は前年より約7%低下したが、2022/23年度の過去最低水準を約5%上回った。

図17 2024/25年度の米国の柑橘類総生産量は28億4千万ドル相当の500万トン



F=予測値

注: 実質生産額は、2009年を基準年とするセントルイス連邦準備銀行の消費者物価指数(CPI)を使用してインフレ調整済み

出典: 米国農務省農業統計局「柑橘類統計要覧」(各年)のデータに基づき経済調査局が作成

農業統計局による出荷箱数の最終推計値は、柑橘類の生産量の減少の主要因がフロリダ州の全品目の減少及びテキサス州のグレープフルーツの17%の減少であることを示している。一方、増加したのはカリフォルニア州のバレンシアオレンジ(3%増)、レモン(9%増)、タンジェリン(11%増)のみであった。フロリダ州の減産は、ハリケーンミルトンの影響の長期化と甚大な被害が続くカンキツグリーニング病(HLB)が要因である。

カリフォルニア州が再び全米のオレンジ生産をリード: カリフォルニア州は2024/25年度もオレンジ生産量で全米を牽引した。同州は2016/17年度に全柑橘類の生産量でフロリダ州を初めて上回り、2022/23年度には全オレンジ(バレンシア種、ネーブル種及び早生・中生品種)でもフロリダ州を超えた。生鮮市場に適した気候のカリフォルニア州は、長年にわたりネーブル種及び早生・中生品種の主要産地となっている。同州では商業的果樹園がカンキツグリーニング病(HLB)に感染していない点も重要である。カリフォルニア州の2024/25年度のネーブル種及び早生・中生オレンジの収穫量は150万トンで、前年度から1%の微減となったが、バレンシアオレンジは3%増の29万2千トンであった。

フロリダ州の2024/25年度のオレンジ生産量は1,220万箱(54万9千トン)と1931年以来の最低水準を記録した。これは、前年比32%減となる。品種別では早生・中生品種及びバレンシア種の両方が同程度の減産となった。加工用オレンジの1箱当たりの生産者価格(樹上換算)は、2024年12月～2025年5月の平均で12.00ドルとなり、前年同期比で3.69ドル(44%)上昇した。

2024/25年度の生鮮オレンジの1人当たり供給量は、前年より増えると予想されており、現在の貿易傾向が続けば8ポンド/人を超えると予測される。これは加工比率の低下、輸入量の増加及び輸出量の減少によるものである。生鮮オレンジの輸入は通常、販売年度の最終4カ月(7月～10月)にピークを迎え、今シーズンは5億2千万ポンドを超える可能性が高い。米国向けの主要供給国はメキシコ、チリ、南アフリカである。

今シーズンこれまで(2024年11月～2025年7月)の生鮮オレンジ輸出量は前年同期比で4%減少し、最終的に7億2千万ポンドを超えることはないと予測されている。今シーズンこれまでの米国産生鮮オレンジの主な輸出先は、韓国(23%)、カナダ(21%)、メキシコ(14%)、日本(12%)となっている。

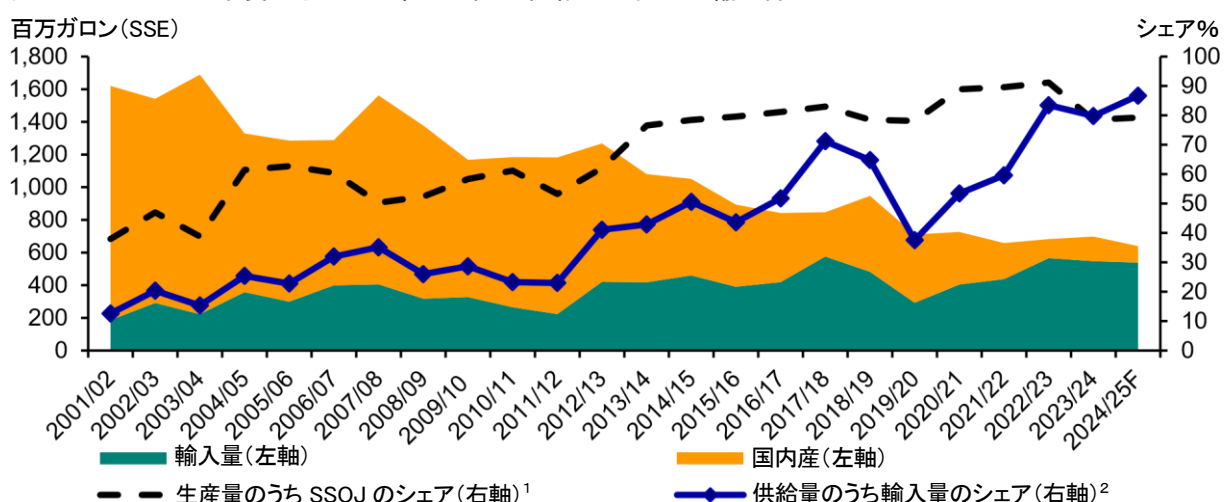
米国のオレンジ果汁産業は輸入依存度が高い：米国では、冷凍濃縮オレンジ果汁(FCOJ)、非濃縮果汁(NFC)、濃縮還元果汁(FCOJを原料とするものを含む)等、様々なタイプのオレンジ果汁が販売されている。フロリダ州柑橘類局は、週次及び年次の加工業者報告書において、FCOJと天然濃度オレンジ果汁(SSOJ: Single Strength Orange Juice)を区別しており、後者にはNFCと濃縮還元果汁が含まれる。

統一関税率表(Harmonized Tariff Schedule)により、オレンジ果汁の貿易においても同様の品目区分を行うことが可能である。FCOJは第二次世界大戦末期に開発され、米国の家庭において朝食の定番として急速に普及した。缶入りの冷凍で販売されるFCOJは、保存性と輸送性に優れ、先物市場でも取引されている。一方、天然濃度果汁、特に非濃縮還元(NFC)タイプは、味と利便性の面から現在の米国の消費者に好まれている。ただし、SSOJは輸送及び保管のコストが高い。

米国食品医薬品局(FDA)は、いかなる量でも濃縮果汁を使用したオレンジ果汁には表示を義務付けている。

天然濃度果汁は現在、米国で製造されるオレンジ果汁の大部分を占めている。1990年代にはFCOJがまだフロリダ州産果汁の主流であり、56～73%のシェアで推移していたが、2004/05年度にはSSOJ(NFCを含む)がフロリダ州産オレンジ果汁の61%に急増し、2022/23年度には91%のピークに達した(図18)。

図18 2024/25年度のオレンジ果汁の国内供給量に占める輸入品のシェアは87%



F = 予測値 SSOJ = 天然濃度オレンジ果汁(Single strength orange juice) (訳注: SSE = 天然濃度換算)

¹ 非濃縮果汁のシェアは、フロリダ州で製造されたオレンジ果汁についてのみ

² 供給量に占める輸入シェアは、輸入量を(生産量+輸入量+期首在庫-輸出量-期末在庫)で除して計算される。

出典: 米国農務省農業統計局「冷蔵貯蔵統計」、フロリダ州柑橘類局「週次加工報告書」及び米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

輸入果汁に占めるSSOJの割合も2000年代初頭以来増加している。2001/02年度にはSSOJは米国のオレンジ果汁輸入量の4%に過ぎず、この年のSSOJ輸入量の42%に当たる340万ガロン(SSE:天然濃度換算)がブラジルから輸入された。その後SSOJの割合は2016/17年度に60%に達し、以後35～58%の間で推移している。2024/25年度には、輸入果汁の約55%がSSOJになると推定されている。

オレンジ果汁の国内供給量に占める輸入果汁の割合は、2014/15年度に初めて50%を超えた(図18)。2024/25年度のオレンジ果汁輸入量は、国内総供給量の85%以上を占める約5億ガロン(SSE)と予測される。ブラジルは引き続き輸入果汁の最大の供給国であり、メキシコとコスタリカがそれに続く。

果汁業界の輸入依存は、主としてフロリダ州の生産量の減少によるものであり、それは病害と天候不順の影響を強く受けている。その結果、2024/25年度の国内果汁製造量は約1億ガロン(SSE)に減少すると予測される。これは常に10億ガロンを超えていた20年前とは対照的である。

グレープフルーツの生産と消費の傾向：米国のグレープフルーツ生産者は、オレンジ生産者と同様の課題に直面している。2024/25年度の米国のグレープフルーツ生産量は29万9千トンで、前年から9%減少した。現在、カリフォルニア州が米国のグレープフルーツ生産量の過半(55%)を占めているが、テキサス州及びフロリダ州も一定の割合を担っている。同年度のテキサス州及びフロリダ州のグレープフルーツ生産量は大幅(16%及び27%)に減少し、全国的な収穫量の減少に大きく影響した。対照的に、カリフォルニア州のグレープフルーツ生産量は2023/24年度を8千トン上回る16万4千トンであった。

今シーズンの米国産グレープフルーツの推計約63%は生鮮市場向けに出荷され、残りは加工用に仕向けられると見込まれる。グレープフルーツの生産量の減少にもかかわらず、価格はわずかに低下した。2024年10月から2025年4月の1箱当たりの樹上換算生産者価格は平均34.02ドルで、前年比1%未満の下落となった。ただし、この価格は過去5年間の平均と比較して依然として28%高い水準である。

今シーズン(2024/25年度)の生鮮グレープフルーツ輸入量は、過去最高であった前年(8,140万ポンド)を11%下回る傾向を示しており、これが続いた場合には6,100万ポンドとなるが、それでも2020/21年度～2022/23年度の3年間の平均を22%上回る。

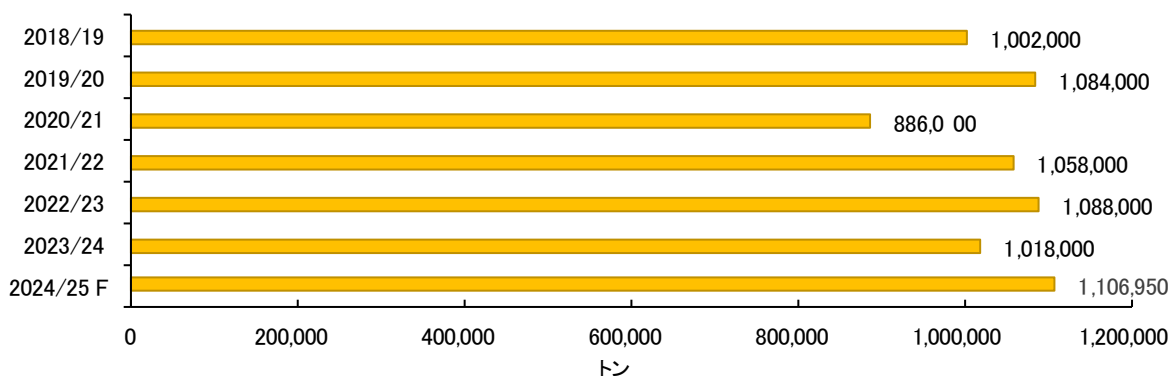
米国の生鮮グレープフルーツの貿易収支は過去10年間で大きく変化した。輸入量は2014/15年度以降概ね増加傾向にある一方、輸出量は減少傾向にある。2024/25年度末には、輸入量は国内供給量の17%を占めると予測され、2010/11年度の2%からの大幅な上昇となる。米国は2022/23年度に初めて生鮮グレープフルーツの純輸入国となり、この傾向は2024/25年度も続くと予想されている。米国向け生鮮グレープフルーツの主な供給国は南アフリカ、ベトナム、メキシコである。

今シーズンこれまで(2024年9月～2025年7月)の米国の生鮮グレープフルーツ輸出量は、供給量の減少に伴い前年比14%減の4,500万ポンドと見込まれ、少なくとも55年間で最低の水準となる。米国産生鮮グレープフルーツの今シーズンこれまでの主な輸出先はカナダ(31%)、日本(28%)、メキシコ(23%)、韓国(10%)である。

2024/25年度のレモン及びタンジェリンの生産量は増加：2024/25年度の米国のレモンとタンジェリンの生産量は増加した。カリフォルニア州及びアリゾナ州の増加により、米国のレモン総生産量は前年比9%増の110万トンに達した(図19)。農業統計局の「柑橘類調査」はフロリダ州のレモン生産量のデータを今年度初めて収集し、同州では3万トンのレモンが生産されたものと推定されている。米国のレモンの収穫量の増加は、カリフォルニア州における好天及びレモン栽培面積の拡大によるものである。

今シーズンの生産量の増加に伴い、米国のレモン輸入量は生鮮市場向け及び果汁向けの両方で減少した。生鮮レモンの輸入量は3億7,300万ポンドで、2023/24年度に比べ12%減少した。レモン果汁の輸入量は4,800万ガロンで、同6%減少した。2024/25年度の米国向けレモンの主な供給国はアルゼンチン(41%)、チリ(34%)、メキシコ(22%)及びウルグアイ(1%)であった。

図19 レモン：カリフォルニア州の記録的な豊作により2024/25年度の生産量は増加の予測



F＝予測値

出典：米国農務省農業統計局「柑橘類統計要覧」(各年)のデータに基づき経済調査局が作成

米国の2024/25年度(2024年8月～2025年7月)の生鮮レモン輸出量は増加し、年度末には1億7,100万ポンドに達した。これは前年比5%の増加である。同年度の米国産レモンの主な輸出先はカナダ(46%)、日本(23%)、韓国(17%)、メキシコ(9%)であった。

2024/25年度のタンジェリン生産量は増加：2024/25年度のタンジェリン生産量は122万トンに増加した。国内生産量の98%以上を占めるカリフォルニア州では、収穫量が前年比11%増の120万トンに達した。この増加は、収量の向上及び栽培面積の拡大によるものである。対照的に、フロリダ州の収穫量は前年からさらに11%減少し、同州の2024/25年度の生産量は1万9千トンと推定されている。

米国のタンジェリン輸入量は、販売年度末(2025年10月)までに11億5千万ポンドに達すると予測されており、これはすでに過去最高であった前年の輸入量から14%の増加となる。過去10年間にわたりタンジェリンの輸入量は増加傾向にあり、国内消費量に占める割合が拡大している。2012/13年度～2014/15年度には輸入量が国内供給量の26%を占めていたが、2021/22年度～2023/24年度には44%に達した。主な輸入先はモロッコ(30%)、チリ(30%)、ペルー(20%)である。

米国の生鮮タンジェリン輸出量も今シーズン増加しており、販売年度(2024年11月～2025年10月)の末までに1億8千万ポンドを超えると予測されている。輸出は収穫がピークを迎える冬季から早春(1月～3月)に集中する傾向がある。米国は依然としてタンジェリンの純輸入国であるが、今年度予想される1億8千万ポンドの輸出量は前年比37%の増で、これが実現すれば史上最高の水準となる。米国産タンジェリンの主な輸出先はメキシコ(45%)、カナダ(26%)、韓国(10%)である。

2025/26年度の米国の柑橘類シーズンの見通し：米国農務省農業統計局は、2025年10月に米国における全柑橘類の2025/26年度の最初の生産予測を公表する予定である。

これに先立ち、カリフォルニア州食品農業局(CDFA)が公表した「2025/26年度カリフォルニア州ネーブルオレンジ現地実測調査報告書」によると、同州のネーブルオレンジ生産量は、前年度(2024/25年度)比6%増の8千万箱(40ポンド箱換算)と見込まれている。この増加は、主に果実の平均直径が6%増大したことによるものであり、報告書では果樹1本当たりの平均着果数は減少すると予測されている。

CDFAはまた、「2025/26年度カリフォルニア州マンダリン現地実測調査報告書」において、タンゴ及びダブルマーコッタフォーラー品種のマンダリンの生産量が3,300万箱(40ポンド箱換算)に達すると予測している。両品種のこの予測出荷量は、前年9月時点の予測を400万箱(13%)上回っている。